

〈書 評〉

Richard L. Strub
F. William Black 著 (第2版)

江藤文夫 (東京大学リハビリテーション部) 訳

高次脳機能検査法

—失行・失認・失語の本態と診断—

片伯部裕次郎 (産業医科大学リハビリテーション医学教室)

リハビリテーション医学の臨床に携わる者として失行、失認、失語の高次機能の障害が、患者の社会復帰への大きな関門として立ち塞がることを経験するのは一度や二度ではない。

神経内科、脳外科の分野においても高次脳機能障害に気付くことにより意外な疾患の存在を診断し得たという例に遭遇することも決して稀ではないと思われる。

従来より種々の高次機能に対する標準化が試みられるようになり、著者が述べる様に“高次脳機能の障害に関する知識の発達はこの四半世紀に急速に成し遂げられ、機能障害の根底にあるメカニズムをより深く理解しつつある。高次脳機能検査法にて器質性脳疾

患を同定、診断して客観的に機能水準を記載記録できるまでに進歩しつつある”のが現状である。

本書においては第一章：高次脳機能検査の理論と概要より始まり、病歴と行動観察、意識水準、注意、言語、関連皮質機能など各章毎にテーマを設け、その内容は臨床症例よりその裏づけとなる基礎医学、機能解剖まで合理的に編集記載してあり、実に有用な書となっている。本書の Geschwind の序にあるように、この本は“貴重な総合的な体系化のひとつの現われであり、臨床場において価値づけられた検査法に論点を置いているのみではなく、できるかぎり多くの場面で既知の解剖学的、生理学的メカニズムとの結びつきも

述べること”を目的として居る。

今回第二版では、病歴と行動観察の章、検査のまとめについての章が主として補正が加えられ、精神科領域と器質性脳病変との関連事項、痴呆との関連事項、前頭葉機能評価法としての Luria の交代性シーケンスの障害など臨床上でも一読に値する事が多い。各章とも参考文献も豊富で、巻末の標準的な心理学テスト解説の項目および高次脳機能検査記録形式も非常に有用である。

神経内科医、脳外科医が疾患の病巣部位を診察手技・レントゲン撮影にて推察し得るように、本書にて習熟すれば短時間で高次脳機能の病巣部位の診断とその記載記録ができるような構成になっている。本書を通して高次脳機能がただの症候論から具体的な評価法さらには基礎医学の裏づけにより普遍的なスクリーニング検査法にまで発展できる可能性を秘めている。

(A 5, 頁 254, ¥3,800, 医歯薬出版 刊)